慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田史学会例会 ; 国史談話会 ; 東洋史談話会 ; 西洋史学会例会 ; 昭和四十年度史学科卒業論文題目 ; 昭和四十年度大学院文学研究科修士課程卒業論文
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.4 (1966. 3) ,p.134(568)- 138(572)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0134

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

丈六の巨像で藤原初期のもの。漆箔はかなり剝れ、かつ変色しており、光背は二重円光の部分のみ存在し、総体的に地味な感じである。むしろ浄瑠璃寺の中尊に豊潤さ、落着き、柔和さを感じる。他に本堂には四天王立像、普賢菩薩像が安置されていた。

本堂より出て左手一段高い所に建つている三重塔へ。吉野時代の建築。やはり地味な感じを受ける。内部に入ると天井が建築工法を見学出来る様に一部開かれていた。塔の心柱が、途中で切断されており、それを太い鎖が支えて塔のバランスを保つているとの説明を受ける。塔より出ると、午前中曇つていた空も完全に回復して、明るい陽差しが地に落ちていた。

（井上卓也記）

一一月六日は馬見古墳群巡り。天理教会の御好意で小型バスを出していただき、連日専ら足による古墳巡りを続けていた我々は、奈良の秋をドライヴする。

馬見古墳群は奈良盆地の西側に連なる馬見丘陵に沿つて存在し、大和盆地東側にある柳本古墳群と並んで有数の古式古墳群である。

見学し古古墳の内から主なものを順に拾つてみる。乙女山古墳は前方部が短い帆立貝の様な形をしており、類例の少く帆立貝式と呼ばれている。形の良い後円部は柔らかな緑に覆われ、優雅な雰囲気は乙女の名に相応しい。草を分けて小高い所に登ると、前方部が僅かに伺え、陪塚が神妙に控えているのが眺められた。佐味田の宝塚は、車から降りて両側に溜池のある小径を二〇分程歩いた丘陵地帯の奥まつた所にある。先生は二階建の石室と家屋文鏡を出土していることで有名と説明された。

昼食後、巣山古墳を見学。これは中期の典型的な前方後円墳で、濠には水が満ち、静かな美しさを示している。この付近一帯は五世紀を中心に葛城氏が勢力を張つていた所と言われ、その一族のものと考えられるとの説明。築山古墳は中期の前方後円墳で相当大きなものである。濠は干からびて、ひび割れた底は病んでいる古墳という感じだが、その為に造り出しの部分が良く見えた。周囲にはすつかり家が建つている。古墳は周囲も共に保存しておくことが是非とも必要だ。古墳巡りの後、大和歴史館の埴輪展を見学。展示数は多くない。陶棺、象形・円筒埴輪、埴輪のもとになつたと言われる壺等。

殆ど手のつけられていなかつた稲の刈り取りも、この旅行の間にすつかり終り、窓外の景色も日が傾くと、急に寒々としてくる。数日前迄の秋の日を浴びてまばゆいばかりの稲海が懐しく思い起された。奈良駅にて解散。

（竜原武嗣記）

三田史学会例会

昭和四十一年一月二十八（金）二九（土）日。三一一番教室（国史）四三四番（東洋史）五〇一番（西洋史）

昭和四十年度卒業論文発表会

昭和四十一年一月二十九日（土）午后五時　西校舎学生食堂

卒業生送別会

国史談話会

昭和四十年五月廿日（木）西校舎カーテンルーム
新入生歓迎会
飛鳥の寺　小川　伸之氏
昭和四十年六月一日～二日
春期見学旅行　伊豆方面

東洋史談話会

昭和四十年十二月七日（火）午后三時　西校舎
ネパールの自然と人
8ミリ・スライド併用　寺田　鎮子氏
昭和四十一年二月十八日（金）午后六時
於　日比谷ニュー・ヒビヤ・タウン
竹田竜児教授海外留学歓送会
卒業生送別会

西洋史学会例会

昭和四十年九月廿二日（水）第一会議室
アウグスチニアニズムの成立について　近山　金次氏
昭和四十年十月十三日　第一会議室
ボナヴェントゥーラのフランシスコ伝について　坂口　昂吉氏
昭和四十年十一月八日（水）第一研究室史学共同研究室
イスラエル考古学発掘記　小川　英雄氏

昭和四十年度史学科卒業論文題目

国史学科

大谷　顕治　平安朝におけるもののけの思想
中畑　義昭　室町時代の庭園発達の研究
大久保幸作　藤原仲麻呂政権に対する一考察
佐野　和雄　橘諸兄
寺沢　珠美　八幡宮の発達と放生会
田中　博子　行基
成岡ミネ子　茶道の形成過程について――珠光を中心として――
小倉　美冬　高山右近に関する一考察――キリシタンの忠誠観念をめぐつて――
従二　祥子　司馬江漢の蘭学放棄の背景
村井恵美子
北村、恵子　狛犬の研究
岡井　恵子　道元の北越入山について

松田　猶臣　漂流民に関する一考察
吉田　春子　日清戦争当時の対外意識とその性格
林　京子　縁切寺東慶寺研究序説
田畑　敏子　キリシタン時代における仏基教理論争
藤田　明信　島原一揆についての一考察
端山　恵子　徳川家救解運動と和宮
中田　敏子　近世前期における銅貿易の研究
村山夫宣子　兵庫開発問題に関する一考察——薩英関係を中心として——
前田悠紀子　華族会館の創立事情
小杉　礼子　蓮如の吉崎占拠の要因
松本　浩男　西南戦争における熊本民権党の役割
細川　泰子　王政復古に至る政局と土佐藩の動向
小山　博美　文久二年における幕府の内情——横井小楠の思想と行動——
通年スクーリング
金子恵津子　享保期の米価問題とその対策について
渡辺　妙子　利久のわびについて
石井　元子　東海道線全通と旧宿駅の盛衰——小田原・三島・岡崎清水の近代工業化を中心として——

東洋史学科

茂沢　方尚　遊侠研究
上田　博之　司馬遷——歴史家としての自覚——
湯川　武　通商史より見たクラヴィホの旅行——十五世紀初頭・東西間通商概観——
松井　晶子　西蔵における中・英・露の介入——帝国主義下の植民地政策と中共の少数民族政策からのアプローチ——
土屋　達彦　現代アジア史の意味——その方法論的考察——

西洋史学科

有賀　成良　アメリカの政治的伝統と保守主義
千葉　悦子　フェビアン社会主義とその影響——一八八〇年から一九一〇年代まで——
道正　光子　フリードリッヒ大王の政治思想について——人道国家主義の理想と権力国家主義の現実——
藤林　悦子　英国の対印度干渉政策——ノースの服務条例成立事情の意義——
深川　紘子　バブーフの思想の歴史的背景とフランス革命期におけるその展開——バブーフの陰謀の前提として——
羽鳥　公子　一九世紀ロシアにおける急進的西欧派インテリゲンチャのユートピア性
原　千賀子　ジョン・ウィクリフとロラーズ運動に関する一考察
波多野雅子　ヒトラーの反ユダヤ主義思想形成過程——ウィーン時代における——
畑中　洵子　ベンジャミン・フランクリンとアメリカ独立戦争

日南田文枝　ジャクソニアン・デモクラシーの意味
平井　勝子　フレデリック・ジャクソン・ターナーのフロンティア学説とその形成
堀江　郁子　パネールの土地問題――アイルランド自治運動の一過程――
井浦　淑　ピューリタニズム――安息日厳守主義を中心として――
飯田　健三　捕因期におけるメシア思想の成立――第二イザヤを中心として――
池田　貞子　ゼークト将軍の国防軍再建政策
岩井加奈子　小ピットのフランス革命対策に関する一考察
金井　靖子　教育分野におけるトーマス・ジェファソン
込刈　綾子　ジョン・ヘンリー・ニューマンの政治思想の一研究――特にその保守主義と自由主義について――
川村　道子　シュタインの行政改革の歴史的意義
小泉　恵子　コンスタンチヌス帝改宗に関する一考察
小泉　節子　一九世紀前半におけるロシア農奴制下の領主経営
小松　洋子　ロンドン・コンミューンとその分裂（一二六三年）
近藤　梢　セシル・ローズを中心とする植民斗争
国藤加寿子　ドイツ革命における協議会運動
真下　英信　僭主抬頭の時代背普――ペイシストラトスを中心として――
松川　国昭　列強各国の極東政策と日英同盟
松尾　洋子　一八二〇―三〇年代のアメリカにおけるセクションの対立――国内交通改良問題を中心に――
松浦　博子　一二世紀のヒューマニズムについての一考察
三戸　裕子　アメリカ外交史上より見た米西戦争の一考察
永野　芳子　米国憲法制定会議に関する一考察――フィラデルフィア、一七八七年――
中里　良子　スペイン市民戦争――共産主義の果した役割についての一考察――
成田みゆき　大統領内閣時代から独裁へ――ブリューニング時代におけるワイマール共和国の姿――
西川緋可子　中世における多様性の一考察
西野あや子　カーペット・バッガーと黒人政治
小川　決子　西ドイツ自立化と冷戦
岡　千代子　エリザベス朝絶対王政下の議会――ピーター・ウェントワース事件をめぐつて――
岡本　孝子　アメリカにおけるハワイ併合問題の一研究
岡村加奈子　後期ローマ帝国におけるバガウダエ運動の意義
大井上信子　初期チューダー王朝の財政政策
坂上　直　一八一二年戦争後の西漸運動の意義
清水　勝子　銀の流入を中心としたスペインの盛衰――ハプスブク王朝下の近世経済史序説――
清水　絹子　エリザベス朝におけるジェントリー階級の考察
重田　芙佐　イギリスにおける海外政策の一側面――インド植民地

塩野　光子　政策を中心として——
須田ゆり子　ワイマール共和国初期におけるドイツ国家人民党
末永　節子　ヴィクトリア時代の一急進論者ハリエッタ・マルティノーに関する考察
鈴木　優子　ヨーロッパにおける大学の発展とその自治——英国を中心として——
竹本　靖子　ラッパロ条約成立に関する一考察
竹村　順子　一六世紀におけるカトリック教会内の改革運動とイエズス会の創立
竹中　洋子　穀物法廃止とその経過
照沼美恵子　初期マサチュセッツ神政的寡頭政治の崩壊過程にみられる自治精神の発展——自由主義者と貴族主義者の政治的対立——
内川喜代子　一九世紀（一八三〇—一八四一）におけるトルコ海峡問題——パーマストン外交を中心に——
内山　邦子　第一次大戦直前におけるバルカン問題とクーストリアハンガリー帝国の動向
植木　晧子　ピューリタニズムの救貧思想
和田　照子　米国における婦人参政権運動——一九一九年—一九二六年に至るシュトレーゼマン政策——その究極目標——
山田　洋子　ジョセフ・チェンバレンの社会帝国主義にみる南阿政策——特にその内政的背景と展開——
山口智恵子　初期ギリシア人の自然観
山内ユミ子　米加国境問題に関する一考察——オレゴン移住を中心として——
横田　紀義　イギリス公正貿易運動の展開
吉住　邦子　チャーチスト運動の発生とその背景

昭和四十年度大学院文学院文学研究科修士課程卒業論文

国史専攻

天羽　利夫　北陸中部山岳地方晩期縄文文化の性格——御物石器の考察を中心として——
長谷川恒雄　幕藩社会基礎構造の展開過程

東洋史専攻

岩見　隆　Tārīḫ-i Baihagi について

西洋史

西本　富　精神的シオニズム——アハッド・ハァームの思想——
坂根　克子　ワイマール共和国の崩壊に関する一考察——ブリューニング内閣の崩壊と東部救済問題——